

中間報告書

補助事業名	ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業							
事業期間	令和5年4月1日 から 令和6年2月29日まで	大学名	北海道大学					
実施概要	<p>本事業の1年目では「ミュージアムをめぐる対話(ANALYSIS)」と題して、各領域・組織の専門家を招きミュージアムを取り巻く社会的現状と課題について育成対象者とともに考えてきた。</p> <p>2年目では「ケーススタディを通じた寄り添い(INSIGHT)」と題して、1年目より少人数で深く学ぶ実践形式のケーススタディを通じて様々な領域の知見に寄り添いながら、地域社会が直面する課題にミュージアムならではの視点を用いて、実践・自走につなげるための支援を提供し、今後の協働に向けた知識とスキルを身につけていく。具体的には、各分野におけるケーススタディの蓄積と活用の現状をテーマにキックオフシンポジウム(活動①)を開催する。引き続き、現在特にミュージアムに求められている「観光」、「記録と記憶」、「社会包摂・文化多様性」(活動②～④)を取り上げ、セミナー形式、現地での見学やワークショップなどの実践的活動を含めたケーススタディを展開していく。さらに、活動②では、北海道大学総合博物館をフィールドに今後可能な観光支援の形を構築し、試行する。併せて、このケースにおいて事業内容の改善と持続可能な運営を目指すために事前から事後の各段階において評価を実施する。各育成対象者が活動②～④での活動成果を発表する報告会(活動⑤)を開催する。</p> <p>最後にクロージングシンポジウム(活動⑥)では、北海道内各地のミュージアムを対象に、地域課題解決や地域経済の促進につながる取組みに関するインタビュー・シリーズを実施した成果をまとめ、北海道の事例を中心に、全国ミュージアムの動向や現状に照らし合わせて考えていく。</p>							
	※ 詳細(講座名、講師名、コマ数、公演名、会場名、公演回数等)は下部の各活動欄に記入してください。							
共催者名・後援者名・協賛者名等とその役割	該当なし							
全活動合計	計画	実績	差	計画と実績の差異理由				
来場者	210	221	11	育成対象者の幅をひろく想定したこと、オンラインでの受講を可とするイベントが多くなったことにより、当初の計画以上に多くの方に参加していただくことが出来た。また、参加者数が増えることによって学びが散漫にならないよう、現在、少人数で深く学ぶワークショップ形式の授業も進めているところである。				
育成対象者	90	146	56					
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業職員	その他
	人数	47	0	33	29	10	24	42
育成対象者具体的な職業	<ul style="list-style-type: none"> ・社会教育系専門職(ミュージアム学芸員を中心に、司書、アーカイヴィストなど) ・文化施設系専門職(ホール・劇場の担当者、制作者、プロデューサーなど) ・自治体職員(文化政策、文化施設、観光政策の担当者など) 							
アートマネジメント人材育成目標	申請時			達成状況				
	<p>1) ミュージアムの新たな機能を担うために必要な対象領域や対象組織との対話を積極的に受け入れる人材</p> <p>2) 自身が企画する事業において、その構成内容の幅と支援する連携ネットワークを段階に広げることができる人材</p> <p>3) 上の実践を経験したのちに、博物館政策や博物館行政におけるこれまでのミュージアムの役割やミュージアム像を変えていく人材</p> <p>これにより、ミュージアム、文化施設、地域をフィールドとして地域文化の底上げを担う高度人材を輩出する。</p>			<p>昨年度末に実施した「クロージングフェスタ」や、そこから発展した今年度のインタビュー・シリーズを通じて、普段は顔を合わせる機会が少ない関係者同士が集まる機会が生まれている。本学がこれまでに築いてきた関係機関とのネットワークや信頼関係により、本事業が参加者同士の対話の触媒になることができていると言っており、また、政策や行政といった方面については、現在実施中の「ミュージアムと観光の新たな関係を創造する」ワークショップ(10月から1月)において、具体的な事例をもとにした事業評価の実践を試みていく。本学の博物館学研究室がもつ教育・研究上のリソースを活かし、少人数を対象にしたこのような実践的ワークショップを行うことで、受講者が自身の職場や活動に取り入れられるスキルや経験が蓄積されつつある。</p>				
事業の社会的な役割、効果	申請時			達成状況				
	<p>本事業の効果については、活動ごとの受講者数や育成対象者の満足度などを定量的に測定する。また、今年度のケーススタディでは活動②を対象にロジックモデルを用いたセオリー評価、プロセス評価、試行終了時にはアウトカム評価を行い、このケースにおいて事業内容を改善するとともに、持続可能な運営スキームの構築を目指す。さらに、以下のような社会的役割を果たすことが可能となる。</p> <p>1) 「ミュージアム＝生活に必要な基盤」として認識され、今まで以上に地域に密着した存在となる。</p> <p>2) 異分野への理解が深まり、ミュージアム側が積極的に地域社会の多様な主体との連携を働きかける。</p> <p>3) 育成対象者間のネットワークを構築するとともに、ミュージアムと大学の関係を築く。</p>			<p>・インタビュー・シリーズの成果映像を本事業のホームページに公開すること等により、地域生活に密着した存在としてのミュージアム事例と取組みについて発信することができた。(左記1)に対応)</p> <p>・各イベントを通じて、従来は接点になかった分野の知見を学び合うことができた。アンケートからも、本事業が新たな行動のきっかけになっていることをうかがうことができる(左記2)に対応)</p> <p>・昨年度からのイベントやインタビュー・シリーズの取材を通じて、北海道内の各ミュージアムと関係者とのネットワークを築きはじめている。具体的な一例として、10月26日、27日に釧路市立博物館で開催された北海道博物館協会ミュージアム・マネジメント研修会を共催し、本事業の教員が基調講演およびワークショップを行った(左記3)に対応)</p>				
事業に関して学会発表、メディアでの掲載実績や予定	<ul style="list-style-type: none"> ・9月に北海道内のミュージアム関係者へのインタビュー映像を本事業のホームページで公開した。 ・インタビューの内容を今年度中に出版物としてまとめる。 ・本事業の取組みと成果を学会で発表し、学会誌にも投稿する。 ・ケーススタディの成果報告会を開催する。 ・3年間の活動やケーススタディの成果を誰でも活用できるようにデータベースとして公開する。 							
事業で得た課題や経験、今後の活用方法	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道内の事例を集めて発信する「インタビュー・シリーズ」は、北海道内のミュージアムに関わるキーパーソンへのインタビューを行い、それらを短い動画に編集して発信するものである。より多くの人びとの学びにつなげるために、今後の活動においても、インタビュー・シリーズの成果映像を活用していく予定である。(なお、「インタビュー・シリーズ」は2023年8月に終了しているが、活動⑥の一部として実施しているため、活動⑥の完了時にあわせて報告する予定である)。 ・文化施設関係者では開催当日は仕事の都合で参加できない方も多く、オンライン配信と事後アーカイブ配信のニーズに応えるために、オンライン配信時の音声不良と接続問題を改善した。 							
担当者所属・氏名	今村信隆 (北海道大学文学研究 院准教授)	電話	011-706-3912					
		E-mail	no_imamura@let.hokudai.ac.jp					

活動①

講座名 企画名	2023年度 キックオフシンポジウム「記録をどう「つくる」「つたえる」「つかう」か-文化施設におけるアーカイブのあり方を考える」							
講師名 出演者名	【パネリスト】佐藤良子(静岡文化芸術大学准教授)、甲斐賢治(せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター)、岩崎久美子(放送大学教授) 【司会・コーディネーター】佐々木亨(北海道大学文学研究院特任教授)卓彦伶(北海道大学文学研究院特任准教授)							
日時	2023年7月30日(日)13時00分～17時00分				コマ数	4コマ(1コマ1時間)		
会場・教室	北海道大学文系講義棟6番教室(対面)及びZoomを用いたオンライン形式の併用					計画	実績	差
					来場者	150	99	-51
					育成対象者	30	76	46
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	24	0	19	13	5	6	9
実施概要	<p>北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムでは、初年度である2022年度に、「対話と共生」、「モノと情報のリスクマネジメント」、「財政をとりまくブラックボックス」、「評価の呪縛からの脱出」といったテーマについて議論し、さらに、最後のイベントであるクロージングフェスタでも、「ミュージアムの価値をどう創造するか-経営における「対話」と「理解」-」というテーマが論じられた。ここからみえてきたのは、ことばによる他者との「対話」とチーム・組織における「理解」形成の重要性である。</p> <p>これを受けて2023年度は、社会が抱えるさまざまな課題にミュージアムの力をプラスする方法を、より具体的に、個々のケースに寄り添いながら、探っていくことを目指す。そのための出発点として本シンポジウムでは、「ケースで学ぶ」ということ自体の価値や意義を整理し、文化施設における「記録」の作成・伝達・活用といった問題について考えた。</p> <p>静岡文化芸術大学の佐藤良子氏は、一般財団法人地域創造の「公共ホール音楽活性化事業(おんかつ)」の事例を具体的に紹介しつつ、全国各地で実施されるおんかつ事業の記録をどうアーカイブして活用していくのかという問題や、出来事や経験そのものを保存できない音楽芸術・舞台芸術にとってのアーカイブの意義などの問題を提起した。せんだいメディアテークの甲斐賢治氏は、「3がつ11にちをわすれないためにセンター(わすれん!)」の活動を軸に、地域の人びとが主体的に記録を編集していくコミュニティ・アーカイブの考え方や、記録の当事者性や責任といった課題を指摘した。放送大学の岩崎久美子氏は、「おんかつ」や「わすれん!」を成人学習論の文脈で整理し直し、経験・対話・省察といったプロセスが地域の学びにもたらす意義について考察した。これらのレクチャーを受けてイベントの後半では、北海道大学の佐々木亨特任教授と卓彦伶特任准教授の司会・コーディネートにより議論が交わされた。個々のケースから学ぼうとする今年度の事業に先立って、「ケーススタディ」という方法論自体をスタディすることができたとともに、「対話」や「理解」といった昨年度からのキーワードをさらに掘り下げ、これまでの学びと今後の事業とを接続する機会にもなった。</p>							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	<ul style="list-style-type: none"> ミュージアムをめぐる最新の知見を学ぶとともに、ミュージアム経営と地域との連携に貢献する「ケーススタディとアーカイブ」の重要性について考えることで、今後のミュージアム人材に必要な能力について、さまざまな分野の事例から整理することで「異分野融合力」を高めることができる。加えて、このことが、当該年度の活動に参加する際に育成対象者の指針やモチベーションになることが期待される。 本事業における今後の諸活動に向けたディスカッションのベースとなる情報を提供し、育成対象者間の「寄り添い力」を高めることができる。 ミュージアム関係者などとそれ以外の市民とがシンポジウムという開かれた場でディスカッションに参加することで、関係者は市民の声に接することができ、市民はミュージアムをめぐる課題について知見をひろげ、「課題発見力」を高めることができる。 				<ul style="list-style-type: none"> 公共ホールの音楽事業、震災後のコミュニティ・アーカイブ、成人学習論、博物館の評価学、地域ミュージアム論という、異なるジャンルの専門家が集まって議論をすることで、異分野が柔軟に融合して課題に取り組むことの一例を示すことができた。参加者のアンケートには、たとえば、「おんかつの仕組みや現場でのまなざし、コーディネーターの気付きなどは、音楽の分野だけではなく、ミュージアムや美術館の分野にも通じるものがあると感じた」といった気づきが見られた。 今後の諸活動のベースになるという点に関連して、参加者からは、「今年度のテーマに関する頭出し・方向感の討議が行われたことが、キックオフシンポジウムとして適切であったと感じた」といった意見が寄せられた。 ミュージアム等に関心のある一般市民の参加も、ひろく募ることができた。アンケートに寄せられた声のなかには、たとえば、「事業の価値を直接的に理解・支援する方々だけでなく、納税などによって間接的に事業を支えてくださる方々の理解を得る方法をもっと議論したい」といったものがあった。市民を巻き込んだ議論の必要性を改めて認識する好機になった。 			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	<ul style="list-style-type: none"> 活動①の準備と実践、その後のアーカイブ視聴(YouTube動画)の配信を通じて、「ケーススタディ」の意義や課題を再考することができた。本事業の今後の活動が単なる事例の寄せ集めに終わらないようにするためにも、「ケース」で学ぶことの意義を共有し、各事例の土台にすることができた点は大きな成果であったと考えている。本シンポジウムの成果が、今後の各活動を有機的に関連させるためのハブになるよう、努めていきたい。 特に、北海道内の事例を集めて発信する「インタビュー・シリーズ」は、北海道内のミュージアムに関わるキーパーソンへのインタビューを行い、それらを短い動画に編集して発信することで、事例から学びあうという試みにほかならない。地域の事例を整理し発信することが、より多くの人びとの学びにつながるのだという本シンポジウムでの学びを、こういった活動に活かしていくように模索しているところである(なお、「インタビュー・シリーズ」は2023年8月に終了しているが、活動⑥の一部として実施しているため、活動⑥の完了時にあわせて報告する予定である)。 運営上の課題として、オンライン配信時の音声が悪であるとの指摘を複数の参加者からいただいた。これを改善するべく、事後的に参加者からのヒアリングを行い、今後の活動の音声改善策を講じることができた。 							

活動②

講座名 企画名	ケーススタディを通じたインサイト(1) 観光—観光客が訪れる場をこえたミュージアムの役割							
講師名 出演者名	【パネリスト】石川直章(小樽市総合博物館 館長)、山田央(七飯町歴史館 学芸員)、花岡拓郎(大和ミュージアム 学芸員) 【コメンテーター】石黒侑介(北海道大学国際広報メディア・観光学院 准教授) 【司会・コーディネーター】卓彦侑(北海道大学文学研究院 特任准教授)							
日時	①【シンポジウム】令和5年9月24日(日)13時~17時 ②【ワークショップ】令和5年10月~1月		コマ数		(1コマ1時間) ①【シンポジウム】4コマ ②【ワークショップ】12コマ(4回程度、1回3時間)			
会場・教室	①【シンポジウム】北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟W203室※ZOOMを用いたオンライン配信を併用 ②【ワークショップ】北海道大学文学研究院などにて対面で開催		来場者		計画	実績	差	
			育成対象者		30	72	42	
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	12	0	8	11	2	12	27
実施概要	<p>ミュージアムが観光に関して、①具体的にどのように関与しているのか、②ミュージアムのどんな機能がさらに観光への支援を可能にし、それによってどのような効果が生じるのか、この2つのことについて、観光客が訪れる場を提供することに力点が置かれていないミュージアムの役割・機能を検討することを目的とする。</p> <p>①に関しては、ミュージアムが観光地としての役割以外に、地域全体のまちづくりや地域ブランディングに貢献している事例についてより広く知ってもらうためにシンポジウム形式で開催した。シンポジウムの前半は、3名のパネリストによる報告、後半は本学国際広報メディア・観光学院石黒侑介准教授とのディスカッションが行われた。石川直章氏と山田央氏によって観光施設整備において歴史的な情報や地域農産品のブランド化に関する学術的な情報を提供する小樽市総合博物館と七飯町歴史館の事例について報告した上で、花岡拓郎氏が大和ミュージアムのような特定テーマを取り扱うミュージアムが地域観光および地域発展にどのように寄与するかについて紹介した。後半のディスカッションでは、観光分野の専門家から国内外の事例のヒントを交えながら、ミュージアムが目指すべき文化観光の行方について議論した。</p> <p>②に関しては、「ミュージアムと観光の新たな関係を創造する」ためのワークショップを10月から1月にかけて4回程度実施する予定である。具体的には、ワークショップ参加者が所属しているミュージアムまたは北海道大学総合博物館を事例に、ミュージアム自らが持つ資源を活用して、現状ではどのような役割や支援を観光に関して果たしているかを把握した上で、さらにその資源を活用して、今後、観光とどのような関係作りが可能なのかを検討する。手法としては、評価学のプログラム評価の考え方を活用し、ロジックモデルを使ったセオリー評価やアウトカム評価を実施し、対象ミュージアムにおける観光への役割・支援のあり方を考察する。</p>							
アートマネジメント 人材育成目標	申請時				達成状況			
	<p>・育成対象者は、観光とミュージアムとの関係性をあらたに認識することが可能となるとともに、多くのミュージアムで導入されている評価手法を見直す新たな視点や考え方についても知識や情報を得て、「課題発見力」を高めることができる。</p> <p>・育成対象者は、講師やファシリテーターとのディスカッションを通して、観光におけるミュージアムの役割と活用について具体的に計画を考え、「寄り添い力」や「課題解決力」を向上させることができる。</p> <p>・育成対象者自身が勤務するミュージアムだけでなく、より広域範囲を評価対象とする事業に関して、これまで以上に深くコミットできるようになり、より広範囲で適用できる「課題解決力」を身につけることができる。</p>				<p>・近年、多様な分野から注目されているミュージアムの文化観光について、パネリストによるミュージアム現場の取組みを報告した。観光の専門家とのディスカッションでは、ミュージアム側と観光側の立場と見方についての意見交換を通して、文化観光推進の可能性と課題について考えるきっかけとなった。今回の内容に対する満足度が高く、実施後のアンケート調査では、「満足」が66.7%、「まあ満足」が23.8%で、合わせて90.5%の参加者から高い評価を得ることができた。</p> <p>・具体的には、「観光×文化」について学べる場というものが、行政職員やミュージアム職員にたくさんあると、ますますおもしろいミュージアムが誕生しそうなので、そういった場にも、今後期待したくなりました。」「予め観光を視野に作られたミュージアム、ミュージアムのある都市が観光地になったミュージアム、そして地域との関係を大事にするミュージアム、それぞれの立場からのお話を聞くことができたのが興味深い体験でした。それぞれ立場の違いはあれど、自分のミュージアムはこうだという明確な立ち位置を持っていらっしやるのが「印象的」など受講者の実務での「寄り添い力」や「課題解決力」につながるような感想が寄せられた。</p>			
活動で得た課題 や経験、今後の 活用予定	<p>・シンポジウムでパネリストの報告とディスカッションの際に出てきた問題意識を10月から実施する「ミュージアムと観光の新たな関係を創造する」ためのワークショップで活用する予定である。</p> <p>・②「ミュージアムと観光の新たな関係を創造する」ためのワークショップの成果は、2023年度公開成果報告会(活動⑥)で報告する予定である。</p>							

活動④

講座名 企画名	ケーススタディを通じたインサイト(3) エクスカーションとシンポジウム「ミュージアムからはじまる共感の文化圏」							
講師名 出演者名	【パネリスト】岡部兼芳(はじまりの美術館館長)、高橋麻衣(八戸市美術館学芸員)、山口一樹(夕張市教育委員会学芸員)【司会・コーディネーター】今村信隆(北海道大学文学研究院准教授)							
日時	2023年9月2日(土)11時00分～16時30分				コマ数	5.5コマ		
会場・教室	夕張市拠点複合施設りすた多目的ホール(対面)及びZoomを用いたオンライン形式の併用					計画	実績	差
					来場者	30	50	20
					育成対象者	30	37	7
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	11	0	6	5	3	6	6
実施概要	<p>今日のミュージアムやそのコレクションは、社会包摂や文化多様性といった課題の解決に大いに寄与する。令和4(2022)年度に実施したレクチャーシリーズ「対話と共生」では、幼児や視覚障害者など、多様な利用者にミュージアムやアートをひらく先駆的な試みが紹介され、ミュージアムが社会包摂に寄与する可能性を参加者とともに確かめることができた。また、同じ2022年に国際博物館会議(ICOM)の規約が改められ、「インクルーシブ」や「ダイバーシティ」が新たなキーワードとして博物館の定義に盛り込まれたことも、記憶に新しい。こうした点を踏まえて本活動では、ミュージアムやそのコレクションをさまざまな立場の人びとに向けてひらくことが、単に福祉的な事業であるにとどまらず、新しい対話や交流の起爆剤になりうるという点について、エクスカーション、レクチャー、ディスカッションを通じて考えた。</p> <p>エクスカーションでは、夕張市教育委員会の山口一樹氏の案内で、夕張市拠点複合施設りすた及び夕張中学校を見学した。夕張市は、2007年に財政再建団体になり、2012年には積雪の重みで市立美術館の屋根が倒壊してそのまま閉館を余儀なくされたという経緯をもつ。その後、旧夕張市立美術館の所蔵作品を保管してきたのが、夕張中学校である。エクスカーションには、旧夕張市美術館館長の上木氏も参加してくださり、中学校の教室で保存されてきた美術作品の現状を知ることができた。また、拠点複合施設りすたは、2020年3月にオープンした施設で、これまでに2度、旧夕張市美術館の旧蔵作品展を開催してきた。旧美術館の歴史を引き継ぐこの場所の特徴や意義についても学んだ。</p> <p>シンポジウムでは、はじまりの美術館(福島県猪苗代町)館長の岡部兼芳氏から、障害者の芸術活動を軸とした美術館の運営が人びとをゆるやかにつないでいくという事例をご紹介いただいた。八戸市美術館の高橋麻衣氏からは、2021年に新しい建物で再開されたばかりの同館の特色、コレクションの保存や展覧会の実施だけにとどまらない広範な活動、そして地域の期待と今後のミュージアムの方向性といったお話を聞くことができた。夕張市教育委員会の山口一樹氏からは、旧夕張市美術館旧蔵作品展の概要とその際に行われた来場者との時間をかけた対話の試みが紹介され、語りを聞くことから改めてみえてくるコレクションのさまざまな価値を再認識する機会となった。</p> <p>ディスカッションでは、ミュージアムが共感の輪をひろげ、多様性を受け入れる柔軟さや、過去を省みするための拠り所を与えてくれる事例が共有された。札幌圏からのみならず、オンラインを通じて各地から参加者が得られたことに加えて、地元・夕張市の文化関係者にも参加していただくことで、地域に密着しながら学びを深めることができた。</p>							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	<p>・「社会包摂」や「多様性」といった重要な理念について、さまざまな実践例から学び議論をすることができる。このような議論を通じて受講者は、日常の業務や活動で自身が直面する課題を整理し直し、従来は顕在化していなかった問題にも目を向けることで、「課題発見力」を高めることができる。</p> <p>・ミュージアムやそのコレクションは、一方で地域文化の要にもなるが、他方で地理的な枠組みを超えて人びとをつなげる力にもなりうる。そうしたさまざまな事例に基づきながら議論し、関係者とともに考えることで、各現場でも活用しうるような高度な「課題解決力」を学ぶことができる。</p> <p>・北海道夕張市の事例は、人口減少社会である日本のさまざまな地域においても、目を背けてはならない問題である。そのなかで、美術館のコレクションやアートが地域社会に果たす役割を学び、「寄り添い力」を身につけることができる。</p>				<p>・ミュージアムが人びとの福祉や障害、人口減少やまちづくりといった事柄にも力を発揮することができるのだという考え方はすでに世界的な潮流だと考えてよいが、その先進的な事例が、国内のさまざまな地域でも育っているということと共有し、学び合うことができた。夕張市の事例は、人口減少社会である日本の各地においても、直面しうる課題であることから、今後の地域ミュージアムのあり方を考えるうえでヒントを学ぶことができた。参加者からのアンケートには、「美術館や図書館等の文化施設への固定観念が揺さぶられたように感じます」、「博物館が社会福祉や地域の中での役割・貢献できることなどを、具体的な例として知ることができた」、「リモートだけでは感じることでできない現地ならではの空気感や、雰囲気をつかめることができ非常に良かったです」といった声が寄せられた。</p> <p>・ミュージアムの存在や活動、そして収蔵されているコレクションの力を、改めて掘り下げることができた。参加者のアンケートには、「アートを通じて障害に対する見方が変わるといった視点は、こういった視点もあるのだなと感じるとともに、芸術の力の大きさを感じました」、「共感、共生感、居場所づくり、知り合うこと語り合うこと寄り添うこと、これからも意識して参りたいと思います」といった前向きな感想が寄せられた。</p>			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	<p>・キックオフシンポジウムの際にも問題になった、ケースから学ぶという活動の一つとして、地域の事例に寄り添った活動を展開することができた。特に、開催地となった夕張市の事情については、シンポジウムに参加してくださった地域の方々からも大いに学ぶことができた。実際に現地を訪れるというエクスカーション方式の強みを認識するとともに、こちらが事前に想定していなかった、インフォーマルな学びの可能性にも今後は配慮していきたいと考えている。</p> <p>・運営上の課題としては、①Wi-Fi環境の問題からオンライン配信がスムーズに開始できず、スケジュールが押ししまったこと、②YouTube上にレコーディング動画をアップロードするタイミングが遅くなったこと、の2点が挙げられる。いずれも改善可能な問題であるため、今後改善していきたい。</p>							